連載 関係からみた子どものこころと育ち

第14回

抜毛癖の前思春期男児にみられる母子間の世代間伝達

小林　隆児　Kobayashi Ryuji　大正大学人間学部臨床心理学科教授，くじらホスピタル

夜尿，爪咬み，抜毛などが出現した不器用な男の子

N男：初診時10歳(小学５年)。

家族構成および家族背景：父親(会社員)，母親(専業主婦)と，弟の４人家族。父方祖父(公務員)は農家の長男で，生真面目で禁欲的な人だった。父親は祖父への反発が強かったが，いまでは関係も良好という。父親は子どもに厳格。母方祖父は６人同胞の次男であったが，長男が幼くして死亡し，下の弟と本人の２人のみ生存。早くから新聞配達をするなど苦労して育ったが，苦労話は娘である母親にほとんど話したことはない。高校卒業後，勤労学生で大学を卒業し，新聞記者としてかなりの名を成した人である。戦時中は特攻隊に入隊していたが，出撃の数日前に終戦を迎えたという波瀾の人生を送ってきた人でもある。母方祖母は７人同胞の末っ子(５人は男性)で，非常な自信家で，多才な能力の持ち主であったが，家庭的な面は極めて乏しい人であった。育て方もかなり厳しかったという。２年前の冬(N男が小学３年の２学期末)，一家はのんびりした南国から日本海側の大都市Ｆ市に転居。郊外に母親の実家があり，祖母は健在である。家族および親族に精神疾患の発現はない。

発達歴および現病歴：N男は在胎36週の早産で出生。生下時体重2,560g。吸引分娩で臍帯巻絡，仮死などの明らかな周産期障碍があった。母乳で育ったが，乳を飲まないときも母親の乳房をよくしゃぶっていた。身体運動発達は全般的に少し遅れ，始歩１歳４カ月，よく転ぶ子どもだった。運動は苦手で，図鑑などを好んで読んでいた。しかし，言葉の発達は早かった。幼児期は他児との接触を避けて１人で過ごしがちであった。夜尿が小学校低学年まで断続的ながら続き，爪咬みは現在も続いている。母親に甘えも示さず従順でおとなしい子どもという印象であった。そのためN男の気持ちがつかめず，母親はイライラすることが多かったという。しかし，こうした面は自分にとても似ているとも思っていたという。N男は几帳面で強迫的な面をもちながらも，整頓は下手でよく注意されていた。苦手な運動とは裏腹に，幼児期からこましゃくれていて，大人顔負けのことを盛んに言っては周囲の大人を感心させていた。南国での小学校２年間はとても楽しかったという。

とくに誘因があったか判然としないが，３年のころから抜毛が出現してきた。夏休みになるとひどくなり，親の干渉の度合いが高まったことが関係していたと母親は推測している。

その年の冬，南国からＦ市の小学校に転校。都会的な慌ただしい学校の雰囲気になじめず，抜毛はひどくなっていった。学校で１人になりたいと思っても周囲の子どもがいろいろと話しかけてくるので，それを拒否すると反発を受けて殴られたりするらしく，保健室によく逃げ込むようになった。そこで事態を心配した保健室の養護教諭のすすめで，母親同伴での来院となった。初診は小学５年時の夏の終わりであった。

初診時の状態

N男は年齢に比べて小柄。弟のほうが活発でたくましくみえる。抜毛のほかに特記すべきこととして，身振りの模倣がやや拙劣で不器用さを認めるとともに，母子ともにやや抑うつ的であること，筆者はハンマーを手にして膝蓋腱反射をみようとすると「打診法をするんですね」とすぐに反応するなど，身体面の未熟さとは裏腹に，話す内容や話し方は大人びていた。第二次性徴の発来はまだで，子どもらしいあどけなさが残っていた。

知能検査（ウエクスラー式）では全IQ120と優れていたが，動作性IQは言語性に比してかなり低く，不器用さを裏づけていた。

小学校時代の学業成績および行動評価を通知表の記載からみると，先の知能検査結果に示されるような高い知能水準にもかかわらず，学業成績は低く，小学低学年ですでに図工や体育の評価が低く，３年時には国語・社会が５段階評価の４であったにもかかわらず，しだいに両教科も高学年になるにつれ低下していた。行動評価では３年時に対人関係を回避し，本読みに没頭していることが記載され，４年時には友達の発言に対して敏感に反応するなど，周囲の人たちに対して被害的な構えをとるようになっていたことがうかがわれた。

治療経過

治療は母子同席で，セッションは毎週１回約１時間，計13回。５カ月間で治療は終結した。

●第１～２回

N男の現在の気持ちに焦点を当てて面接をすすめていくと，N男は母親に強く訴える調子で「苦しいのにわかってくれない。お母さんがいないとき，泣いているんだぞ。勝手な想像をされてこちらはいい迷惑です。当たらないことが多い。人の気持ちもわからないで。いまにも爆発して親でも殴りたい気持ち」と涙ながらに語るが，母親は「どうして」「なぜ」と質問を繰り返すのみで，N男を受け止める余裕のなさが印象的であった。

しかし，N男のいままでにない激しい訴えに，母親もしだいに涙ぐみ始めた。そこで筆者は母親の感情を取り上げたところ，母親自身もF市に転居してまもなく塞ぎ込むようになり，家に閉じこもり，好きな外出もしなくなったことが語られ，母親は当時，引っ越しうつ病になっていたことが推測された。

●第３回

相変わらずN男は母親に訴えるが，母親はただ事実を確かめるのみで，N男の感情が母親に伝わらない様子であった。そこで筆者はそれを取り上げ，「お母さんは子どもの訴えに対し，懸命になって説得しているように見えますね」と指摘すると，母親は堰を切ったように語り始めた。それまで懸命に耐えていた母親の防衛が一気に緩んだのであろう。話は自分の幼児期，学童期にまで及び，自分も親にいつも気を使って遠慮し，親の期待に応えようとする気持ちが強かったこと，小学生のころ，同性の友達に溶け込めず男の子とばかり遊んでいたことなど，母親は実母との間でN男と同じような体験をしてきたこと，女性同士で親密な関係をもつことが困難であったことなどを語った。

こうした治療の転機は，筆者が母子交流の特徴を取り上げることによって容易に訪れた。N男の学習困難に基づく不全感と，それを乗り越えようとする苦悩・つらさ・悲しさと，母親が子ども時代に抱いていたせつなさ・頼りなさといった感情が，ともにどこか心細い気持ちから生まれたものであったということがわかったことが，おそらく母親の防衛を緩めた大きな要因の１つになったのではないだろうか。

●第４回

微熱，腹痛，悪心などの心身症様症状が出現し，N男の心身のバランスに大きな変化が起こっていることがうかがわれた。抜毛は著しく減少していた。表情にもいままでにない明るさが戻ってきたと母親は報告した。N男は家で，それまで弟と２人で寝ていたが，親子４人一緒に寝るなど，親に対して素直に甘えるようになってきた。

●第５回

治療開始後，しばらく渋っていた登校を母親に送られながらも徐々に再開。母親も少し安心してきたと語った。まもなくN男は，夜は再び弟と２人で寝るようになった。学校では昼休みにドッジボールの仲間に入れてもらえるかが心配で，交友関係を巡る問題がしだいに大きくなってきた。

●第６回

面接室で母親に対してのびのびと振る舞うN男の態度に，「こ

の子は，この診察室に入ると突然人が変わったようにのびのび振る舞うんです」と母親は嬉しそうに語り，N男の訴えに黙って聞き入るなど，母親の内面的変化が感じられた。そうしたなかで母親は，「人目を気にして育児はきちんとしたいという気持ちがとても強かった。子どもは自分に頼って，何かするときは必ず『お母さんはどう思うか』と自分の意見を聞いていた」と，過去の育児体験を想起し始めた。こうした話のなかから，母親がN男のつらさをどこかでは感じつつも，自分も実母の期待に応えなくてはという強い思いがあり，育児に対する理想が高くなっていたことに気づきにくかっただろうと思われた。

●第7～8回

N男は「お母さんの言うことを聞いて学校に行くと，他人から馬鹿にされる。何でも親が決めるからいやだ。親の言うことを聞いたら悪いことばかりで腹が立つ」と，母親を激しく非難するようになった。

N男は，いままで努めて母親の期待に応えようとしてきたが，交友関係のなかでそれではやっていけなくなり，いままでの母親の命令口調を非難するのだった。しかし，「ひどい言葉を使うと嫌われるんじゃないかな」と思い，攻撃性の表出に強い抵抗があることもうかがわれた。すると母親も友人から「学校の先生みたいな話し方を子どもにするのね」と指摘されたことを想起し，自分も子どもとの間に他人行儀な態度をとっていたことに気づき始めた。こうして母子間での交流が一段と深まっていった。その結果，母親は初めてN男の傷を見て痛いだろうなという実感がわいてきた。それとともにN男のハンディキャップをあるがままに受け入れられるようになってきた。

●第9～10回

抜毛の衝動にかられるのは「自分は正しいと思っているのに，相手が反対のことをしたり言ったりして，相手を憎く思ったとき」であるとN男は語り，抜毛が攻撃衝動の高まりに関連していることがわかった。N男は家で，父親にも「たばこをやめろ」などと，はっきりと自己主張するようになってきた。母親の話題は，N男や自分の子ども時代からしだいに夫婦関係へと移り，夫に「秘書としては有能だが，人の気持ちはわからない人」だと言われてきたことが明らかになり，夫婦間でも感情交流にかなりの葛藤がはたらいていることをうかがわせた。

●第11回

面接場面でN男が母親をやりこめる場面が影をひそめ，家庭で自己主張ができるようになった。すると母親は，突然この数日の間に自分が少しわかってきたと，自分自身の行動や内面の変化を語り始めた。「人と接するときは，つい相手に服従する立場をとってしまう。しかし，自分のなかの理想は高い。こんな気持ちが中学のときに急に高まり，周囲の人と会ってもどこかなじめず，自分をとても意識するようになった。自分自身が母に支配されていたと思う。なぜなら，母の前でいつもいい子になろうと思っていたから。母からいつも『あんなふうになりなさんな』『こうしなさい』と言われ続けて，母の期待に応えようとしてきた。N男も何かやるときには『お母さんはどう思うか』と，まず私の意向を聞いていた」と言うのであった。母親自身が実母に対してとってきた態度と，N男の自分への態度が極めて似通ったものであることに，母親自身が気づくようになった。

そこで母親の子ども時代についてさらに尋ねていくと，小学4年のときにF市に転居してきたが，女の子とはほとんど遊ばず，いつも男の子といたずらをしたり，非行まがいなことをしていたことが語られた。さらに，中学時代，校則に反する靴を履いていたが，経済的に苦しんでいる母のことを思うとそのことを言えず，学校側からよく注意されていた。自分はいつも実母の期待に応えないといけないと思っていたが，いま振り返ると，子ども時代は劣等感の塊であった妹のほうが，実際は母の期待に応えている。このように自らの子ども時代を内省的に語り，実母に支配されていた強い自我理想からやっと解放され始めた。

●第12～13回

母親はN男の育児を振り返り，N男の自律心を育てようと心がけたつもりだったが，実際はモデルを示さず，ただ指示するだけで，N男ができないと自分1人で何事も片づけてしまっていたこと，話す能力が優れていたため，ついその面にのみ過剰な期待をかけていたことなどが語られた。

次いで，南国から実母が近くに住むF市に転居してきて，母親は安心するどころか，逆に内的緊張が強まり，実家に行っても心安まることがなかったことが語られた。そこで筆者が「(母親の)お母さんとの間でまだ自分の本当の姿が出せていないから，子どもの本当の姿を受け入れることができないのかもしれませんね」と解釈すると，「最近やっとPTA活動などで自分の意見をはっきり出しても安心できるようになりました。子どもにも『それは

だめよ』と言うのではなくて，『それでいいのよ』と言えるようになりました」と，母親は自分の態度の変化を嬉しそうに話した。

母親の内的変化と同時に，行動面の変化も認められたことから，今回で定期的治療は終結することを提起し，母親の希望により以後は時どき経過観察をもつことにした。

その後，N男は登校を開始し，同世代の仲良しと再び遊ぶようになり，抜毛もほぼ解消した。こうしてN男が子ども同士の世界を創造し始めると，そこで初めて母親も夫との間ではっきりと自己主張できるようになったことが報告され，夫婦の間にも気持ちの通い合いが生まれ，親同士，子ども同士というようにおのおのの世代での好ましい交流が生まれてきた。

甘えたくても甘えられない子ども

N男の発達歴を振り返ると，母親の前で従順に振る舞い，表立っては甘えることがなく1人遊びを好む子どもであったが，治療経過を振り返ると，内面では母親への強い「甘え」が潜在化していたことがわかる。甘えたくても甘えられない心理状態にあったであろうことは容易に想像されるが，その背景要因を考えると，ことはさほど単純ではないことが治療経過から明らかになっている。

発達障碍を思わせる不器用さ

本来，N男に知的な問題はなく，優れているほうであったが，大人顔負けの言葉を使う一方で，身のこなしがぎこちなく，何らかの発達障碍(発達性協調運動障碍，学習障碍など)があったと思われる。そのためか対人関係に対しても回避的で，学校でも家庭でも1人で本を読むなど，知的好奇心に駆られた生活を送っていた。しかし，実際には学校でどのように振る舞ったらよいのか困惑することが多く，母親に頼らざるを得なかったのであろう。心細くて母親に甘えたい気持ちを常に抱きつつも，現実には大人顔負けの言葉を使うため，ついつい母親は言葉によるコミュニケーションに頼ってしまい，N男が困ったときにはそのつど具体的に言葉で指示をするなどの手助けをしてきたのであろう。こうして，N男の情緒的側面と知的側面との際立ったアンバランスは母子間でしだいに増幅していったと思われるのである。

前思春期不安に伴う反応としての抜毛

すでに本連載で幾度となく取り上げたように，前思春期は子どもから若者へと移行する，情緒的に非常に不安定になる時期である。自分の内面から突き上げてくる漠とした衝動にしだいに圧倒されるようになると，何事も親の期待に沿うことでどうにか無事過ごしてきた子どもも，それではやっていけなくなる。外ではどう振る舞ったらよいか不安は高まる一方で，心細くても母親に対して頼ることはできないという寄る辺ない，心もとない心理状態に追いやられるのであろう。これまでに経験したことのない強い不安に襲われることもある。この時期の子どもたちに多様な精神病理現象が起こるのは，このような背景に基づいている。N男の抜毛という反応もその1つの表現型とみなすことができる。

母親の実母に対する強いアンビバレンスと，高い自我理想の形成

本来であればこのような心細い状態にある子どもを母親はしっかりと守ってやらねばならないのであるが，それを困難にした要因が治療のなかで浮かび上がっている。母親がN男の心細さ，つまりは「甘え」の感情を受け止めることができなかったのは，母親自身も実母との間で強い葛藤が続き，実母に対して強いアンビバレンスを抱いていたことが深く関係していた。母親も実母との関係のなかで，自分の思いどおりにやりこなす万能的で支配的な実母の期待に応えようと努め，そのために高すぎる自我理想が形成されていたのであった。実母の近くに転居しても心は安まらず，引っ越しうつ病にさえなったことがそれを裏づけていた。

母性的共感性が蘇る

治療ではN男の気持ちがおもてに表れやすくなるようにするとともに，母子間で動いている気持ちを感じとりながら，それを母親が気づけるように心がけていったが，比較的短期間で母子関係に大きな変化が起こっている。N男の「甘え」を母親が受けとめることができるようになるためには，母親が自身の子ども時代から今日までの実母に対する強いアンビバレンスに気づき，それを内省できることが必要であった。

その内省が可能になるにつれ，母親のもつ本来の母性が賦活化

してきたのか，子どもの痛みを自分の痛みとして感じとることができるようになってきた。それまでは子どもの気持ちを頭で理解することはできても，共感することは困難であったということである。子どものアンビバレンスを緩和するためには，母親自身もそれに対処することが求められることを教えられる。

母子関係の修復が夫婦関係にも反映する

こうして本来の母子関係，つまりは「甘え」を受容した関係が蘇ったのち，興味深いのは夫婦関係にも本来の姿が蘇っていったことである。母親が素直に自分の気持ち，すなわち，相手(夫)に対する「甘え」に類する思いを，おもてに表わすことができるようになったことが契機となっている。親子関係であれ夫婦関係であれ，両者をつなぐ感情としての「甘え」がいかに重要な意味をもつかがわかる。こうして初めて子どもは子どもらしい世界を，親は親らしい世界をもつことができるようになるのであろう。

親子関係の世代間伝達

子どもを虐待する親は，過去に自分の親から虐待されてきたことが多いことはよく知られている。虐待にまつわる世代間の負の連鎖といわれるものである。こうした現象は虐待関連問題のみならず，アルコール依存の家族，その他の精神病理現象においても認められるが，本事例でも，先の母子関係の特徴で述べたように，同様な現象が起きていることが確認できる。

それでは親子関係の何がどのように世代を超えて伝わっていくのであろう。そのルーツを探っていくと，乳幼児期早期のアタッチメントをめぐる問題に突き当たる。子どもが母親に対して抱く「甘え」が充足されず，そこに強いアンビバレンスが生まれる。そして，子どもから親になり，子どもを育てる際に，再びアンビバレンスの問題が蘇ってくる。〈育てられた者〉が〈育てる者〉へと立場が変わろうと，子ども時代の自分の姿はいつまでも生き続けていることを，いまさらながら教えられる。

末永蒼生出版記念講演会

■**テーマ**：色が語る生命のメッセージ：子どもの子育て，大人の幸福探し……，そのヒントは絵の中に－

■**日時・会場**：

①4月11日㈰　13：30～15：30
福岡天神クリスタルビル(福岡市中央区天神4-6-7)
地下鉄「天神駅」徒歩4分，西鉄「福岡駅」徒歩7分

②5月16日㈰　13：30～15：30
ウインクあいち(名古屋市中村区名駅4-4-38)
名古屋駅徒歩2分

③6月20日㈰盛岡にて予定

■**内容**

「小さいうちからゲームばかりやっていて大丈夫？」「学校でイジメられていないか心配」「子どもが学習障害と言われた…」など，子育てに関する疑問や悩みはつきません。そんなときに，どう接すればいいのかヒントになるのが，子どもが描いた絵です。絵に表れた色や形には，その時々の子どもの心が驚くほど反映されています。講演会では，長年にわたり子どもの絵の研究を続けてきた末永蒼生が数多くの実例を通して絵の見方を紹介。子どもの心が見えない，接し方がわからないなど，幼児から思春期までの子どもをもつ親なら誰もが抱く不安に応える内容になっています。さらに，絵などのビジュアル表現が，人間の創造性を育んだりメンタルケアにいかに役立つかというアートセラピーの効果にも言及。子どもから社会人，高齢者までの幅広い実践例を通して，落書きやぬり絵など気軽な自己表現を楽しむことが，心の健康にもつながることを伝えていきます。

■**参加費**：一般：3,000円　会員：2,000円

■**申込方法**：メールまたは電話にて下記「株式会社ハート＆カラー」まで
(一般チケットは，オンラインでも購入可)

■**問い合わせ・申込先**：
株式会社ハート＆カラー
TEL：03-5474-7810
メール：info@heart-color.com
オンライン：http://heart-color.shop-pro.jp/
東京都港区青山3-5-1　南青山O&K 4F

information